

物真似あり、女中の酒の座には、頭巾かぶりし醫者坊あり、かしこにどよむ大笑ひは、いかなる興にかあらん、こゝに船頭のいさかふは、何の理屈もなき事なり、老人の墓會は、仙家のかげをうつし、役者の聲色は、芝居もこゝにうかぶかとうたがふ、卵子々々、田樂々々、瓜西瓜、三味の長糸賣る聲西南にかしかましく、東北に漕めぐる、風呂をたく船、酒をうる船、菓子にあらぬ饅頭あり、鼓にあはぬ曲舞あり、あるはみめぐり、深川にうかれ、あるは兩國の橋にとゞまる、遊ぶ姿ことくなれども、たのしむ心ふたつならず。○下略

〔都の手ぶり〕兩國の橋

大江戸より本所へわたしたる橋を兩國の橋とぞよぶ。○中夏のころは、ことに舟あまたつどひて、いと竹の音、川波にひゞきあひておそろしきまで聞ゆげにひろき都の中にも、なぞらふべき所だになく、こよなうにぎはしきわたりになむ。川づらには、葭をあみてへだての垣となし、すのこだつ物あまたならべて、いこふ人ごとに茶をもてあきなふめり、又おなじつらなる假家つくりて、小弓の射場まうけて、いとなみとするものもあり、髪つがぬる家、舟かす家、もちひくだもの、酒うる軒など、所せきまでたちならびたり。

〔甲子夜話二十四〕世ノ有様ハ、今ト昔トハ變ルモノナリ、予浦清十歳頃ヨリ十八九バカリ迄ハ、兩國ノ納涼ニ往キ、或ハ彼ノ邊ヲ通行セシニ、川中ニ泛ル舟イク艘ト云數シラズ、大ハ屋形船、小ハ屋根舟、其餘平タ船、ニタリ舟杯云フモ數シラズ、或ハ侯家ノ夫人女伴花ノ如ク、懸燈ハ珠ヲ連子タルガ如キ船數十艘、コノ餘絃管、鬪拳、唱歌、戯舞ニ非ザルハ無シ、故ニ水色燈光シテ、映ニ繁盛甚シ、ユノ間ニ往々一小舟アリテ、大ナル鼓ヲ置キ、節操モナク、漫ニ累撻シ、ソノ喧噪云バカリナシ、コノ舟必ズ絃詠謡曲、或ハ倡舞スル船ノ傍ニ到テ鼓ヲ打テ大叫ス、人以テ妨トシテコレヲ避ケシムレドモ退カズ、止ムコトヲ得ズシテ、金錢ヲ與ヘテ退カシム、鼓舟コレヲ受ケ、乃退テ又隣船